

## JOMF 派遣医師便り (2015. 1)

## ◆シンガポール◆

## 講演会〈海外渡航者の健康管理～感染症対策を中心に〉報告

シンガポール日本人会クリニック

日暮 浩実

シンガポールの2014年のデング熱確認患者数は18157人となりました。これは2013年の22190人に比べれば減ってはいますが、2008～2012年までの5年間の平均が5000人程度であったことを考えるとまだまだかなり多い発生数です。

そうした中、1月19日にシンガポール日本人会で、〈海外渡航者の健康管理～感染症対策を中心に〉が開かれました。この会は〈日本国厚生労働省 国内侵入・流行が危惧される昆虫媒介性ウイルス研究班〉から委託を受けた活動の一環です。



主催者は東京医科大学病院渡航者医療センターで、海外邦人医療基金が共催いたしました。また、在シンガポール日本大使館、シンガポール日本人会の後援を受けました。100名を定員としていましたが、それを上回る申込数をいただき、当日は91名の方々に御来場いただきました。内訳はご家庭の主婦の方々16%、一般の会社の方々70%、医療関連8%、学校関連6%でした。

日本から2名の専門家にお越しいただきご講演をいただきました。

一人目の講演者は東京医科大学病院 渡航者医療センター教授の濱田篤郎先生で、〈グローバル感染症の脅威～今年はどうな感染症が社会を騒がせるのか〉という題目で約1時間御講演をいただきました。内容は多岐に及びますが、以下のようなものがありました。

- ① 途上国の滞在者が感染症に罹患する頻度----デング熱の頻度がインフルエンザと同じぐらい高いこと、動物咬傷による狂犬病のリスク（註：実際の罹患率とは大きく異なります）が、かなり高いことが指摘されました。
- ② 狂犬病ワクチンのすすめ----狂犬病は発症すれば死は免れないので、予防が大切であることを改めて確認しました。
- ③ インフルエンザ----東南アジア一般では北半球の冬の時期（12月末～2月）に大きな発生数のピークがあり、雨季（6～8月）にも小さなピークがあること。雨季には人が屋内で過ごすことが多くなり、人と人との距離が近づくことが流行の原因と考えられること。ただし、シンガポールの雨季は12～1月ごろですが、やはり、6～7月ごろにピークが認められるのは他の地域からの人の流入など別の理由が考えられること。
- ④ デング熱----日本での輸入例が増加していること。日本での媒介蚊のヒトスジシマカは、熱帯シマカのような住宅付近ではなく、公園ややぶなどが生息地となること。そのため、蚊の対策についてシンガポールとは異なる対応となることが考えられる。

また、現時点の通説では、ウイルスは卵には入らないため、日本ではウイルスは越冬できる場がないはずであること。

- ⑤ マラリア——世界的に罹患数は減ってきているが、流行地域では予防薬の服用が大切であること
  - ⑥ エボラウイルス病——過去にも発生があったが、それほど大きな流行とならなかったのは、過去の発生地は森林地帯であり、人の移動が比較的少ない地域であったためであると考えられること。今回の西アフリカの例ではサバンナ地帯であったため、人の移動が容易であったことが感染の拡大につながったと考えられるとのこと。以前は出血熱と呼ばれていたが、そうなる率は20%以下であり、むしろ、強烈な下痢を起こし、ショックに至ることが高い致死率の原因であること。そのため、大量の輸液を行い、下痢を乗り切れれば救命しうる可能性が高くなること。また、発病しても初期には他者を感染させることはないこと。
  - ⑦ MERS コロナウイルス——蝙蝠からラクダを介して人に感染するため、流行地域ではラクダに接触しないこと、ラクダの乳をのまないことが大切。
  - ⑧ 鳥インフルエンザ H7N9 が中国で散発的な流行が続いている。——家禽との接触を避けること、鶏肉や卵は加熱してたべること
- まとめとしては、航空機旅行の発達により、短期間で世界的流行を起こす可能性があるため、正確な情報を入手して正しく怖がるのが大切であることなどのお話を頂きました。

二人目の講師は京都大学学際融合教育研究推進センターグローバル生存学大学院連携ユニット特定准教授の吉川みな子先生でした。〈シンガポール政府の感染症対策〉という題目で約30分の御講演をしていただきました。

吉川先生はシンガポールとの関係が深く、来星回数は60回以上に及びます。環境省との関係も密なため、今回は環境省からパンフレットとパウチを頂いてきてくださいました。パンフレットはシンガポールの国民がデングに対して具体的にどういう行動をしたらよいかということが記されているものです。デング熱を媒介する熱帯シマカは公園ややぶなどより、人の居住区を好むという性質があるため、一人一人が必要な対策をとることが大切であることを強調されました。でもそれはそんなに難しいことではなく、①花瓶の水は毎日替える、②鉢植えの皿の上の水は一日おきに捨てる、③バケツは伏せておく、④物干し竿の先端にはふたをしておく、⑤雨どいの掃除は月に1回は行い虫除けを置いておくといったことです。ワクチンや治療法がないため、蚊を増やさないことが最も有効な対策です。

シンガポール政府関係者から日本人に対してこうした対策を具体的に日本語で説明した機会は今回が初めてのことだと思います。それだけに、日系社会でもデング対策への意識がさらに高まることが期待されます。

また、会場の皆様にはデングに対する意識調査のアンケートにご参加いただきました。この結果は、今後のデング熱対策に役立たせていただくこととなります。

今回の講演、アンケートが少しでも皆様のお役に立てるならば幸いです。